

論 説

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念 と中国人の精神伝説の深層（序論）

夏

剛

「王之所大欲」と「商人的な現実主義」

指導者に必要な鷹の眼と蟻の目、「高瞻遠矚・明察秋毫」の複合能力を論じた¹⁾が、「明察秋毫」の奥義を吟味したい。明晰に見抜く意の「明察」は、日本語では相手の推察を誉める表現と成ったが、出典の『韓非子・孤憤』の「智術之士、必遠見而明察」は、「闘智」（駆け引き）の緊張感に満ちる。一方の「秋毫」は、『角川大辞源』の解の通り、「秋になって生え変わった獣の細い毛。転じて、わずかなもの、微細なものをいう。」

前出の「合抱之木、生於毫末」の「毫末」は、次の「秋毫之末」と通じる。自然法則を以て大事への細心な注意を逆説的に促す老子の此の命題に対して、「明察秋毫」の語源 『孟子・梁惠王上』の譬え話は正論へ導く逆説だ。「有復於王者曰：‘吾力足以举百鈞，而不足以举一羽；明足以察秋毫之末，而不見舆薪。’則王許之乎？”曰：“否。”“今恩足以及禽獸，而功不至於百姓者，独何與？（略）王之不王，不為也，非不能也。”

吾が力は百鈞（千5百^{キロ}）もの物を挙げられるが、一片の鳥の羽は挙げられぬ；眼は秋毫の末端でも見分けられるが、車に積んだ薪は見えぬ、と王に対して申す者が居るなら、王は其を許すだろうか、と孟子が訊くと、王は「否」と答えた。其なら今、王の恩恵が動物にまで及んでいるのに、民衆に及んでいないのは、一体何故であろう、と孟子は指摘した上で、王が真の王者に成れぬのは、為さぬ^{せい}所^い為であり、出来ぬ為ではない、と諭した。

昨今の日本の為政者の不作為も此の結論に当て嵌まるが、相手を論理の罠に嵌める孟子流は鮮やかだ。作為的な論理の矛盾は兵家の「詭道」の堂に入るが、元より中国思想の殿堂は矛盾の論理や論理の矛盾の集合体だ。斉宣王を喝破した「不為也、非不能也」の前段で、彼は「無傷也、是乃仁術也。（略）是以君子遠庖厨也」と言う。『礼記・玉藻』の「君子遠庖厨、凡有血氣之類弗身踐」を踏まえた言葉には、二重の虚実皮膜が隠れている。

禽獸を料理する厨房を君子が遠ざけるのは、殺生に立ち会う事への良心の抵抗だが、血腥い

場面を忌避しつつ其の肉を後で^{しっか}確り食べるのは、名分と実益を両立させる「如意算盤」(虫の良い計算)か。「無傷也、是乃仁術也」は、民衆の評価で心を痛める事は無く、王の思考・行動は仁の心の働きだ、とも解される²⁾。多少の流血は厭わず世論で心を痛めぬのも仁の内だと言うなら、ニクソンの「指導力=倫理的には中性的な物」説と通じる。

宣王は其の「遠庖厨」論に対して、『詩経』の「他人有心，予忖度之」(他人の心中に事が有れば、我は之を^{これ}忖度できる)を引き、「夫子之謂也」(正に先生の事を言うのだ)と感心した。続いて孟子は治世の指針に、『詩経』の「刑於寡妻，至於兄弟，以御於家邦」([周文王が]先ず夫人に典範を示し、其の徳化を次いで兄弟に及ぼし、遂に国家を制御した)を持ち出した。孔子も尊んだ經典を軸とする此の対話は、高次の物と言えよう。

領袖の「心跡・心態」への透視も、領袖の哲学的・詩的な発想 - 素質と同じに次元が高い。孟子は一連の議論を経て、「王之所大欲」を突き止めた。彼の「高瞻遠瞩・明察秋毫」の着眼も、土地を拡張し秦・楚を朝拜させ中国に君臨し四夷を服従させたい³⁾王の最大な欲求も、巨細を跨ぐ全的な規模を持つ。王の遣り方(戦争)で其の欲を満たすのは、木に攀じ登って魚を求めぬのに等しい、との結論⁴⁾はともかく、孟子は大欲自体を否めぬ。

『梁恵王上』の冒頭は前に詳述した通り、国益に寄与する助言を期待した梁恵王と、利より仁義が大切だと説く孟子の遣り取りだ。「功不至於百姓」の表現でも判る様に、孟子は功利や功利への追求を^{やみくも}闇雲に斬る事は無く、俗物的な「急功近利」を高次の大欲とは認めぬだけだった。利に関する両者の考えも鷹と蟻の対に見えるが、日本流の「一寸の虫にも五分の魂」とも通じる様な、「蟻」の字形の小虫・大義の組み合わせは意味深長だ。

蟻は昔の中国では草と共に民の代名詞であり、毛沢東時代でも西側から中国人の形容に使われた。勤勉・密集性の点では、「日本人 = 工蜂」論と同様に妥当だが、蟻の「虫・義」は中国的な道義の土着性や泥臭さの表徴に成る。「工蜂」の「工」は中国語で、「稼働」「職人」「技芸」「精巧」等の多義を持つが、「功」の「工・力」と「利」の「禾・利(刀)」は、共産党中国の主体 労・農・兵と歴史の複線 建設・闘争と吻合する。

共産党中国の建国祝典の「^{パレード}群衆遊行」では、指導者階級 労働者の方陣が常に先頭に出る。建党時代の貢献と開拓の意味で、鉄道労働者の一団が好く先導に当たるが、同じ象徴性が高いのは紡績労働者だ。「文革」後期の毛夫妻は遼寧省No. 2と成った^{おい}姪・毛遠新に、商都・上海の現役紡績女工と結婚させた。留学先のソ連の重機械工場の労働者と結ばれた蒋経国の浪漫史とは偶然の一致だが、其の革命の理想の陰に對の思想が見て取れる。

毛は上海紡績工場の幹部・王洪文を林の次の後継者に選んだが、衣食住行の首と尾に当たる紡績と鉄道は、仕事の性質と従業員の主な性別で陰陽、剛柔の対を成す。蒋経国のソ連時代の同窓・鄧の「鋼鉄公司・綿裏蔵針」と重なるが、功績・業績の「績」の「糸・責」は周恩来を連想させる。人民大会堂で外賓を前に電線コードの^{ほく}纏れを解す彼の仕草は、康熙の心得の「耐煩」

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）
（煩雑に耐える）⁵⁾、乱麻解消の重責を負う為政者の天性の発露だ。

「豪・毫」の複合能力を言う熟語には、「胆大如虎，心細如髮」と有る。戦災の中で豪腕を見せた林彪も、名前と反対の繊細さを持った。毛の寿命を現実的に見積もった前出の演説の中で、彼は政変の陰謀を察知する心構えとして、「見微而知著。月暈而風，礎潤而雨」を引いた。宋の『辨奸論』の主眼には、正に彼の様な「欺世而盗名」の輩を見抜く事が有る⁶⁾が、此の名文を「生存啓示録」⁷⁾とした事は、善悪を超える大物の幅の証か。

孟子の「力拳百鈞・明察秋毫」の比喩の説得力は、此の2つの超人的な力量を欲する「潜台詞」（言外の言）にも在る。毛は自分の性格を「虎気・猴気」の複合としたが、後者の代表格・孫悟空の秘密兵器は、耳に内蔵し「千鈞棒」へ膨らめる針と様々な分身を生む毫毛だ。其処にも窺える「鋼鉄公司・綿裏蔵針」の真髄は、「辛抱・深謀・心棒」に収斂できる。台湾問題を百年先送りにしても構わぬ毛の構えも、左様な「大而化之」^{おおきくしてはかす}である。

諺の「心急吃不了熱豆腐」（急いては熱い豆腐は食べられない）の通り、乱麻を一遍に片付けようとすれば、却って身動きが取れなく成る恐れが有る。時機到来を忍耐強く待ち周辺の障害を潰して行く内に、荘子が王の養生の手本とした庖丁の「迎刃而解」の可能性が出て来る。「大欲は無欲に似たり」の極意は、大きな目標の為に小さい衝動を抑える事だ。「熱読『孟子』」の相場も、「言利」^{イェンリー}と同音の「嚴厉」^{イェンリー}（冷厳）の裏返しと思える。

前出の「主要矛盾・次要矛盾」の弁証法を提起した『矛盾論』（1937）は、『実践論』（同）と共に毛の哲学の双璧を成す。世界（現実）に対する人間の認識の目的は、客観的な解釈ではなく能動的な改造に在る、と彼は主張したが、其の目的意識は「両論」の対にも現われる。両方とも書齋の中の瞑想の産物ではなく、戦争から生まれた戦争の指針だ。日本語の「机上の空論」に当る「紙上談兵」も、紙上の軍事談義・演習の意である。

「文革」前期の正・副統帥^{コンビ}の対の伏線も、林彪が言う「毛沢東思想大学校」の原型も、「両論」の完結の年に設立し、毛が教育委員会主席を兼任し林が学長を務めた抗日軍政大学に遡れる。軍事・政治人材を養成する此の機関の教育方針「堅定正確的政治方向，艱苦朴素的^{スタイル}的工作作风，靈活機動的戰略戰術」（確固として正しい政治の方向，艱苦を厭わず質実な仕事の流儀，臨機応変な戦略と戦術）は、毛沢東の死後も不易の価値でいる。

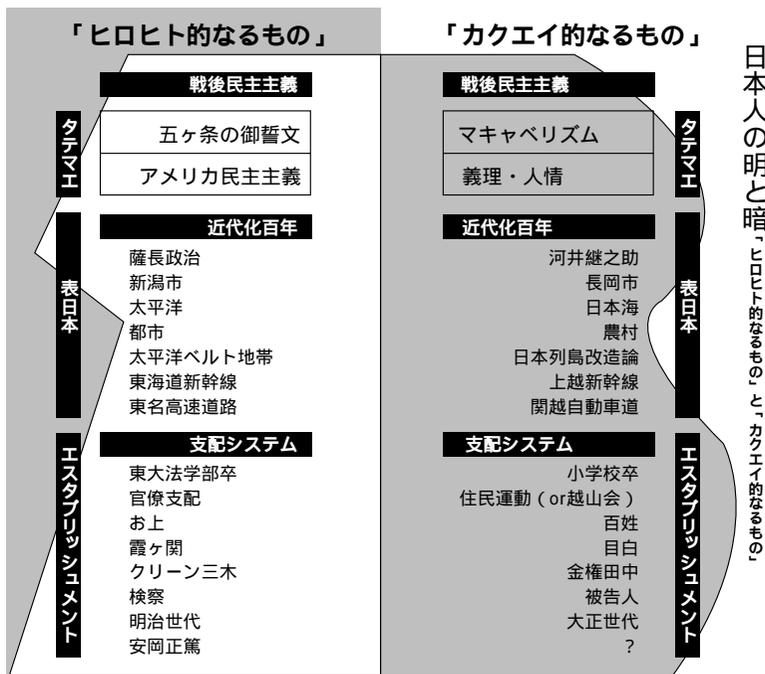
日本と国民党を負かした此の強味の首・尾2項は、上記の毛の鷹揚・応用を貫く。「抗大」の名称に於ける軍・政の順位は、中共の「銃から政権が生まれる」原理、及び此を説いた毛の軍事独裁と符合する。軍の情報責任者を対米交渉の先鋒に当てたのは、政治や外交を一種の戦争と見做す証だ。毛曰く、革命は御馳走ではなく、「温良恭儉讓」では駄目だ⁸⁾。ニクソンも文字通りの真剣勝負だからこそ、「只争朝夕」に共鳴したのであろう。

「談判」の字形の「言・炎」「半・リ」にも、外交儀礼の和気とは裏腹の殺気が隠し持たれる。其の「礼・兵」と対を成す鄧小平時代の鍵言葉「儒商」も、上記の秘密交渉に投影が

見られた。「其它部分可以商量」(他の部分は相談に応じても構わぬ), という毛の指示の中の「商量」は, 和製漢語の「相談」と違って, 商談・衡量の意味が強い。米国側の修正要請を承認せぬ彼は, 中国の根強い商人的な現実主義を遺憾無く発揮した。

邱永漢は『中国人と日本人』(1993)の中で, 両国の国民性を「商人」対「職人」と断じた⁹⁾。台湾から日本に亡命し直木賞を獲った後, 投資の成功で「金儲けの神様」の誉れを得た国際人であるだけに, 十分な説得力を持つ。其は半ば一種の常識と成ったが, 日本の一部に有る商人根性も見逃せぬ。毛の裏の一面に対する上記の概括も, 高野孟の『田中角栄の読み方』(1983)の中の「商人的ナリアリズム」¹⁰⁾を借用した物だ。

再び「文・野」の文脈と繋がるが, 報道人の著者は建前だけに生きる昭和天皇と本音だけに生きる田中角栄との相剋を抉り出し¹¹⁾, 両者が代表した価値体系や精神風土等を次の図式で示した¹²⁾。2つの「戦後民主主義」の右の方は, 「戦後功利主義」とした方が良いと思うし, 「安岡正篤」と対応する「？」は, 「小野賢治」も考えられようが, 明快な分類に違いない。毛沢東や共産党中国に就いても, 此の陰陽, 虚実の照射は示唆に富む。



「山不厭高, 水不厭深」「山不在高, 有仙則名。水不在深, 有龍則靈」

「文革」の大義名分には党・政府内の官僚主義の打破があったが, 大衆を動員して支配構造

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

の变革を図る毛と劉少奇の衝突にも、低学歴の土着派と留学経験者の都会派のずれが隠見する。但し、此の左右の対極に当て嵌まれば、毛の明暗、清濁の同居が目につく。マルクス主義の意識形態と中国の伝統観念、共産党の指導原理と封建帝王の権謀術数、三木武夫の廉潔な理想と田中角栄の泥臭い願望……等の両面が、彼の中に混合していた様だ。

毛は右派が好きだと語り¹³⁾、鄧も笹川良介の類いの者と親しかった。本音を隠さぬ故に付き合い易い面も有るが、此の図式の右の性質を彼等も持ち合わせていた¹⁴⁾。相剋の「両難」を難無く解消し相生へ導く其の複雑系は、中国思想の原型の表徴・「陰陽魚」の、黒の中に白が有り白の中に黒が有る左右対称の様相を呈す。こんな重層性と「跨度」は、「左右逢源」（左右何れの道でも源に逢う。転じて、何方道上手く行く事）を可能にする。

「文革」後の体制が呼び掛けた「一切向前看」（全て前向きに）は、民衆に「一切向錢看」（全て金に目を向ける）と言い換えられた。経済優先の路線は結果的に、人々の「心中賊」

拜金主義を呼び醒ましたが、際立たされた毛の「離見の見」と鄧の「利権の見」は、本当は2人とも兼ね備えていたのだ。高野孟の図式の「建前」の部類に「明治世代」が出たが、『論語』と算盤」論で有名な明治の渋沢栄一も、矛盾の複合体である。

日本資本主義の創始者なる彼は、「英雄好色」を地で行く発展家だが、妾宅に居る時人が急用で訪ねて来ると、渋沢が此処に居るはずが無い、本人がそう言うのだから間違いない、と言って追い返した¹⁵⁾。言行の整合性を慮る性豪の言行は、当時の建前の重みを窺わせるが、滑稽で真摯な虚実皮膜の演出は、「一切向前（錢）看」と絡んで、金銭絡みの場合は「一切合財」、他の場合は「一切合切」と表記する日本語の魔法¹⁶⁾を連想させる。

孔子の「君子喩於義，小人喩於利」の通り、『論語』と算盤は対蹠の物事であるが、渋沢栄一の精神を継承した松下幸之助の『繁栄の為の算数』¹⁷⁾に因んで言えば、道徳律の原理の深層の人間学の算数も『論語』の主眼だ。『論語』と算盤は中国人社会の二重基準の表徴とも成るが、彼の「経営の神様」が繁栄の算数に用いた中国の先哲の「先義後利」¹⁸⁾の様に、『論語』と算盤は各自の内部の二重基準に因って、相互内包の関係にも在る。

太極見立ての「陰陽魚」図の黒・白の二部は其々、反対側の色の小さい点を中に含む。「画龍点睛」を擬って言うと、此の異色の眼睛は「龍」・中国の複眼と思える。魚にも雲や胎児にも映る2つの流線型の図柄から、鄧の「黒猫・白猫」論も思い浮かぶ。格好の善し悪しに拘らず、鼠捕りの能力・成果を価値の尺度とする此の極論の是非や、目標の中身の問題はともかく、進取・収穫を図る目的意識こそが、中国思想の究極で不易の目玉だ。

『実践論』『矛盾論』と同時期の1939年、劉少奇は延安のマルクス・レーニン学院で、『共産党員の修養を論ず』との題で講演した。後に62年修訂版の絶大な人気は、翌63年に「只争朝夕」と詠んだ毛に権威への危機感を抱かせたが、道徳律を勧める此の書の中に、搾取階級の「聖賢崇拜」の虚偽の証として、或る老秀才の本音が引き合いに出された。曰く、孔子の言葉

で自分が実行できるのは、「食不厭精，膾不厭細」だけだ¹⁹⁾。

飯は幾ら白くても宜しく、膾は幾ら細くても宜しいとの拘りは、例の劉伯承の「吃肉」哲学と通じる。日本語の「厭(飽)きない」・「尙い」の同音²⁰⁾と結び付ければ、商人的な執着さえ感じる。中国語の「量」(肉料理)・「素」(精進料理)は、色欲を含む欲望の有無・強弱の譬えに成る²¹⁾が、素晴らしい音楽を聴いて3ヵ月も肉の味を知らぬと言う²²⁾孔子は、肉を価値の代名詞とする即物性に相応しく、大欲を潜める面も有った。

聖賢・孔子も政見を持ち、政権への関心を強く覗かせた。其の意味でも彼は例の図式の中の昭和天皇に近いが、田中角栄の同類には曹操も思い当る。毛が格別に重宝した『三国演義』にも出たが、彼の「蓋世之英雄，乱世之奸臣」は、「山不厭高，水不厭深」と大言を吐いた。孔子の「不厭」と対で捉えると面白いが、孔子の「何陋之有？」で結ぶ唐の文学者・劉禹錫の『陋室銘』には、「山不在高，有仙則名。水不在深，有龍則靈」と有る。

窮乏に見える環境や生き方も道德さえ有れば、安住や自己満足が出来ると言う²³⁾孔子の清貧志向を超えて、此の名文の冒頭の2句は、表題の質素と裏腹に至高の贅沢である。山の貴さは高さに在らず、仙人が住めば有名に成り；水の貴さは深さに在らず、龍が潜めば靈験が有る(神秘に成る)、とは正に画龍点睛の極致だ。「抗大」校訓の「堅定・靈活」や「『論語』・算盤」と重なる「名・靈」は、「龍の国」の精髓の「点睛之筆」を成す。

山本健吉は『いのちのかたち 日本美の源を探る』(1981)の中で、聖地・奥熊野への巡礼体験(同12)から萌した折口信夫の日本研究の題目に触れた。其の「日本人の恐怖と憧憬との精神伝説」²⁴⁾の着眼は、指導者の自意識と強迫観念を切り口にした此の中国研究にも適応できる。「陰陽魚」の目玉めく指導原理や価値体系の要は煎じ詰めれば、系列論文を貫いて来た「名・命」だが、此の対概念の指向性は憧憬・恐怖に他ならぬ。

「安心立命」「安身立命」の対は、再び絡んで来る。前者は『角川大字源』と『広辞苑』で其々、「(仏)信仰によって天命を悟り、心を安らかにし、悩まないこと」、「心を安らかに身を天命に任せ、どんな場合にも動じない。立命は儒教より出た語」と解される。『角川大字源』の「立命」は、「天から与えられた本性を全うして、損なわないこと。“安心立命”〔孟子・尽心上〕“ 殀寿不_レ_レ_レ_レ_レ式，修_レ身以_レ俟_レ之，所_レ以_レ立_レ命也 ”」と成る。

日本で精神修養の格言に好く使われる「安心立命」に対して、中国で広く知られている「安身立命」は、生活と精神の拠り処を保つ意だ。此の成語は『辞海』の解の通り、「指生活和精神有所依託。『景德伝灯録』卷十“湖南長沙景岑禪師”：“僧問：学人不抛地時如何？”師云：“汝向什麼处安身立命？”」超俗のはずの禅門・禅問の即物性も興味津津だが、原典に出た長沙は朱鎔基の故郷であり、同じ湖南省から毛沢東と劉少奇が出た。

「食不厭精」に対する老秀才の共鳴と同様、「安身立命」がより「市場」(市民権)を得たのは、高次・低次の欲求の最大公約数を示唆する。「立命」の出典なる孟子の語録は、短命や長

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

命に関わらず、身を修めて天命に従う事の勧めだ。其の命題の出発点と帰着は命であり、正論の前提は命の長短の大事さの裏返しだ。中国人の現実主義の根底には、同音の「現世主義」が有る。来世が無いからこそ、生への執着も生々しい願望も強いのだ。

俗物の「好色・好勇・好貨」の「貨」と通じて、「貪」の字形の「今・貝」は現金主義の表徴に映る。今の中国に於ける拝金志向の氾濫は、貧困や禁欲への反動だけでなく、即時・即物的な生活態度の根強さも要因だ。但し、現世至上主義と相關する「己身中心主義」は、直ちに利への一辺倒を意味せぬ。個我を軸とする時・空体系の中で、肉体が消えても精神的な存在は継続し得るし、親族や集団への打算的な義理も結果的には義に繋がる。

「子曰、舜其大孝也與。徳為聖人、尊為天子、富有四海之内。宗廟饗之、子孫保之。故大徳必得其位、必得其禄、必得其名、必得其寿。」（孔子曰く、舜は誠に偉大な孝の徳を身に付けた人物だ。其の道徳は聖人並みで、其の尊貴は天子並みで、普く天下を治めた。死後は宗廟に盛大に祀られ、子孫が之を代々継いで行った。故に、偉大な徳は必ず相応の地位を得、必ず相応の俸禄を得、必ず相応の名声を得、必ず相応の長寿を得るのだ。）

『中庸』の此の一節が示す原理は、同音の「徳・得」の弁証法的な相關、及び徳によって得る究極の欲求だ。其の最終目標は4つの「必得」と「饗之・保之」の通り、現世に於ける地位・待遇・名誉・寿命の獲得や維持、永世に亘る歴史の評価と後代の継承だ。栄達・名誉の青写真を見せながら大徳を説く此の儒教の「祖典」の説法は、「保值」（元本確保）・増殖の収益予想を提示した上で、投資や投資対象の保持を勧める手法と似ている。

儒家は禁欲の克己や限定的な自己完結だけでなく、人生の限りを超越する完結無き自己実現も志すのだ。生命の有限に対する自覚が強い程、価値の無限化を目指す強迫観念が生まれ易い。歐陽修の「醉翁之意不在酒、在乎山水之間也」に因んで言えば、「山・水」を享受し且つ「名・霊」も頂戴するとは、虚実両立の大欲である。「有名則霊」（名が有れば霊験が有る）の等式が成り立つなら、美田が無くても子孫に美名を残すだけで十分だ。

台湾の小説家・高陽の『胡雪岩』は、商売熱が高まった数年前の大陸で「経商必読奇書」として風靡した。乱世の中で独り息子を喪い女に見限られた江湖豪傑が、主人公の清末の安徽豪商から再起を勧められた時の「心跡」の表白が、「民之所大欲」として注目を引く。彼は前出の「人死留名、豹死留皮」を引き、「総要做件把別人做不到的事、生前死後、有人提起来、翘一翘大拇指，說一声“某人有種”，這才是不辱没爺娘！」と言う²⁵）。

凡そ人間は他人が遣れぬ事を1つぐらい遣らねば成らず、其で生前や死後に誰かが其の人を思い出して、親指を立てて「凄い（立派な）奴だ」と言えば、此こそ両親を辱めない結果に成る、という彼の人生観・栄辱観は、現代の作家の創作であるだけに、時代や海峡兩岸の体制の違いを超える普遍性が強い。「生前死後」の補足で浮き彫りにされた「人死留名」の重層存命中に名声を得た上で其を死後に留める願望が、第一の要点である。

「有種・没種」の栄辱観念と「無情・有情」の虚実皮膜

論題を始め中国語の原文を多用して来たのは、外国語に直すと隠れ味が消える処に奥義が好く在る故だ。上記の台詞の中の「有種」も、中国独特の表現である。例の訳は人を誉める語義だが、第一義の「度胸・気骨が有る」は、「有種的跟我来(上来)」「肝っ玉の有る奴は付いて来い[掛かって来い]」等、「激将法」(遣る気を刺激する[敵を挑発する]手段)の用例が多い。反対語の「没種」は、意気地・遣る気が無い意の侮辱語だ。

国交正常化の交渉で日本側は、蒋介石は戦争賠償の請求を放棄したが、共産党政権はどのようにかと故意に訊ねた、との風説が日本に有る。相手の自尊心を煽る「激将法」は、「気度」(度量)の評価に敏感な中国人の急所を突く物だが、「気度」ならぬ気概・度胸を種に見立てる発想は、勇気を根本と為す発想に拠る。孔子の「三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」、財産や名声より勇気の喪失を致命的とするゲーテの説も、同じ価値観である。

中国人は「勤労・勇敢・知恵」を民族の美德として誇るが、勇気に譬える「種」は「禾」偏に由って、種を丹念に育てる農耕民族の勤勉とも対応する。例の壮語の中の親指を立てて誉める仕草は、多くの国・民族が共有するが、「拇指」は中国的な言い方だ。「手・母」の字形から成り「母」と同音の「拇」は、日本流の「親指」と通じながら、母親の根源的な役割が強調されるが、物質世界の「万物之母・万物之始」(老子)には種は有る。

「十指連心」(10本の指は心臓に繋がりどれを傷めても痛い)と言うが、指の名称も心性の表徴たり得る。「食指」(人差し指)や「無名指」(薬指)から、「民以食为天」や「無用=無名」の観念が思い当たる。此の系列論考の最大な鍵言葉は正に「命・名」だが、「秋毫之末・輿薪」の対と関わって、生存の資本の確保を説く格言には、「留得青山在、不怕没柴烧」(青い山[山林]さえ残っていれば、薪が無く成る心配は無い)と有る。

対応する日本語の「命有っての物種」は、ダーウィンの名著の中国語訳名・『物種起源(原始)』と重なる。甲斐や見込みが無い事を「没種」とする罵言は、物種が生命の起源を成す事とも関連する。人種・種族の「種」と符合するが、「有種」は古代にも後嗣が居る意が有り²⁶⁾、「種子」は「種」の他に、中国医学の用語として妊娠を促進する事にも言う²⁷⁾。「没種」の無能・不能は、「胆量・骨気」(胆力・気骨)と別の性力も含む物だ。

毛は共産党員を種に譬え、土地なる人民と結合し其の中に根を下ろし開花するよう唱えた²⁸⁾。準投獄の労働改造を体験した作家・張賢亮の小説の中で、作業中に其の語録の歌を歌う「文革」時代の囚人たちが、「種子」の処では改造所の外の女性に色目を使う²⁹⁾。鄧小平が食べ物之乏しい戦争中に御馳走の話で「精神会餐」を楽しんだ³⁰⁾が、同じ「苦中尋楽」の此の「性飢渴」の「宣泄」(発散)と、人間の本性の食・色の両面から対を成す。

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

訪中のニクソンを^{もてな}える文芸晩会で、バレエ・『紅色娘子軍』が上演された。結局は賓客の不評を買った³¹⁾が、異和を承知で見せた「東道主」^{ホスト}の意図は、劇中劇や劇外劇として見処に成る。中米正常化交渉の初回会談の場を人民大会堂の福建（台湾と向き合う省）の間に設定した按配を思い出すまでもなく、台湾に次ぐ中国2番目に大きい島・海南島で国民党軍を負かした赤軍女性中隊の実話に基づく此の作品は、政治的な暗示を込めた物だ。

蒋介石を盟友として来た米国への挑発を兼ねたとしても、中国の「礼・兵」の二刀流の伝統に適う。中共の好戦性の露呈と捉える向きも有ったが、具体的な対敵闘争の思惑はともかく、毛が共産党の哲学とした「闘争哲学」の習性は否めぬ。ニクソンは『スパルタカス』を連想した³²⁾が、作品の「貧苦大衆」対「地主悪覇・支配者」の図式は、林彪等が利用した英雄史観を撃破する為、毛が2年前に打ち出した「奴隷創造歴史」論と合致する。

^{インターナショナル}『国際歌』の冒頭は中国語で、「起来，飢寒交迫の奴隷！起来，全世界受苦の人！」（立ち上がれ，飢寒で逼迫する人々よ。立ち上がれ，全世界の苦しむ人々よ）と言う。「起来，不願做奴隷的人們！」で始まる『義勇軍行進曲』が共産党中国の国歌と成った事は、国造りの原点

奴隷に成りたくない人々の蜂起に符合する。秦始皇が中国を統一し秦が農民反乱で滅びた史実は、奴隷が英雄と共に歴史を創造する主体たり得る原理の証だ。

「受苦の人」の最初の訳は「罪人」だったが、英雄と受難者、革命家と罪人は好く紙一重の差しか無い。毛・周が「匪賊」として首が蒋介石に懸賞を掛けられたが、古典小説の4大名作を觀ても、『三国演義』の劉備と曹操は指名手配を受けた反逆者で、『水滸伝』の宋江と武松は殺人犯で、武松が殺した姦通罪犯・西門慶は『金瓶梅』の主演と成り、『紅樓夢』の作者・曹雪芹の祖父は政争に巻き込まれて家宅捜査・罷免の処分を受けた。

「民以食為天」と好く言うが、「官逼民反」（官が圧迫し民が造反すること）が繰り返す限り、「飯」^{ファン}と同音の「反」^{ファン}も民の天性でいよう。毛の「猴氣」は反逆精神とも解せるが、「有種」の気骨は反骨を含める物か。悪道地主の下僕から赤軍女性中隊長に成長した吳清華も、入隊の頃は孫悟空の悪戯っぽさが有った。彼女は敵の一網打尽を狙う待ち伏せで、例の仇^{かたき}の姿が現われた途端に激昂し、命令を待たず勝手に発砲し計画をぶち壊した。

火力が最大限に發揮できる圏内に敵が深入りしてから攻撃を仕掛ける成功例は、「革命現代様板劇」（革命的現代的模範劇）・『紅色娘子軍』が風靡した最中に、解放軍の男性中隊長・孫玉国が見せた。1969年3月の中ソ辺境戦争で、敵の戦車と兵隊が百^ル、50^ル前に迫って来ても彼は動じず、30^ル程しか距離が無い処で始めて「開火！」（射て）と命じた。黒龍江省珍宝島の防衛を遂げた敢闘で、彼は一躍に国民的な英雄と成った。

毛の指名に由り4月1日に開幕した党大会に出席し、殊勲を報告する榮譽が彼に降って来た。演説の中で其の伝説的な接近戦を誉めた毛は、孫の話の途中と終了後に立ち上がり拍手を送った³³⁾。僅か4年後の次回党大会で毛は脚の無力化の為に、閉幕式の後で自力で立ち上がれな

った。71年の林彪事件で受けた打撃は此の対照にも窺えるが、対ソの警戒から秘密裏に開幕した其の大会は、毛 - 林同盟の頂点であり解消への転換点であった。

2回目の珍宝島戦闘の当日、毛は指導部の会議で前線の善戦に興奮したが、敵はモスクワが^{じき}直に指揮したはずだと林は分析した³⁴。後者の冷静は前者の情熱と対に成るが、其の直観は結果的に当たった。大戦中に休養先のソ連で対独作戦の智恵を貸した事が林の神話の一部だから、過去の同志の手の内を熟知したとしても不思議ではない。ソ連にしても後の中越辺境戦争の際の中国と同じく、自ら訓練した相手から喫せられた苦杯が痛かった。

僅か2年後の林のソ連への亡命は不可解に見えたが、両党・両国の一卵性双生児めく相剋相生を考えれば、^{ベトナム}越南共産党の政治局委員が中越戦争後に北京へ亡命した事と同じに、情理に合う節も感じられる。毛は林の逃走を天が雨を降らす事や娘が嫁に行く事の如く、自然な成り行きとして受け止めた。其の「天要落雨，娘要嫁人」の俗語は、「東辺日出西辺雨，道は無情却有情」という、蜀の童謡を敷衍した劉禹錫の『竹枝詞』を連想させる。

東の方は日が出て西の方は雨で、情（「晴^{チン}」の掛け言葉）が無いと思ったら情は有る。男女の駆け引きを言う此の駄洒落は、字形・「諧音^{ごらあわせ}」の言語遊戯ながら、中国的な発想の根幹中国語の奥義を内包する。日本を「二重言語国家」と規定する書家・石川九楊は、日本は日本語が構造的に秘めた洒落・駄洒落によって生まれた国だと言った³⁵。言語に類似の祖型がより顕著に見える中国は、更に複雑な「両面多重言説国家」と視るべきか。

「晴・陰」で表情や境遇を表わすのは日本語も同じだが、東西の明暗の同居は中国的な^{スパン}「跨度」である。内山完造は和気霽々な宴会の後の商談で冷徹・老獯へと豹変する中国流を、自分に気が有ると田舎者の男に錯覚させる宿屋の京女に譬えた³⁶。笑顔と非情の「鉄面」³⁷、恥をかき捨てる鉄面皮の変幻自在は、時間差に伴う無情と有情の虚実皮膜か。右手で握手しつつ左手で相手の顔を殴る二刀流³⁸も、慇懃・無礼を兼ねる「陰陽怪気」だ。

世界の東西冷戦の最中の中国と米国、台湾海峡兩岸の冷戦中の江沢民と李登輝の間の秘密交渉も、「東辺日出西辺雨」の観が有る。自分は死ぬまでも民族主義者だと言う「叛逃」前の林彪の声涙俱に下った独白（後に詳解）、国境を越えた彼に致死の「神拳」を下さなかった毛の逡巡は、「道は無情却有情」の部類に入ろう。指導者の無情の半面の有情の極め付けは、熾烈な戦火や苛酷な試練、多難・多彩な人間戯劇^{ドラマ}の中で零す涙に他ならぬ。

「北極熊」超大国と「強龍」老大国が激突する際、ブレジネフが現場に近い極東軍司令部を視察した。自ら激励したヘリコプター空挺部隊の突撃ぶりを聞いて、感動の余り涙を流し極東軍司令も泣いた。総書記が叫んだ「偉大だ！立派だ！」³⁹は、正に「有種」と通じる賛辞だが、涙は彼の個性とロシア人の特質を感じさせる。「男兒有涙不輕彈」（男兒は涙が有っても軽々しく^{こぼ}零さぬ）と言う様に、中国の男性は此の際は普通泣かないのだ。

此までに触れた3人の偉人の涙を反芻すると、内山完造に釣られて零れた魯迅の孤独の涙、

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）
秘書が起草した毛沢東宛の始末書の中の僭越な文言で触発された周恩来の悔しい涙、革新宰相の興亡を描く『商鞅』の観劇の際の朱鎔基の共感の涙は、俱に存在の堪え難い重圧に因る疑似極限状況の中の真情の流露だ。中国の歴史の創造者たちの心底の「孤憤」精神や、中国の社会や精神風土に張り詰めた「悲涼」⁴⁰⁾の雰囲気も、其処に窺われている。

「見微知著・著微兼求」：「全体への意志 + 細部への執着」

日本で児童向けの科学博物館を見学した朱鎔基は、こんな物を中国で造る事こそ私の生涯の夢だ、と涙を浮かべて1時間も熱弁を続け周りを驚かせた⁴¹⁾。戦争中に瀕死の子供を目撃した毛は泣いて命の綱のペニシリンを差し出し⁴²⁾、戒厳令発布の前夜に天安門広場で学生たちを見舞う趙紫陽は涙ながら手遅れを謝った。3人3様の涙は魯迅の『狂人日記』の「救救孩子」で共通するが、朱の興奮は心の扉を開く貴重な瞬間として特筆すべきだ。

失脚の直前に或る仲間から糾弾された胡耀邦は、槍玉に上がった過去の発言の真偽を質すと、自分は憶えていると言われて、信じられぬ表情で泣き出した⁴³⁾。悔しさを表わす漢語の「委曲」(「委屈」の類義語)は、委細・物事の奥底の意味も有るが、内面の最も微妙な感情の露出は、「見微而知著」の「衆妙之門」たり得る。「晴・雨」は表情の明と暗、笑顔と涙の譬えにも成るが、威厳・矜持の常態に比べて非常態の涙は稀少価値を持つ。

上記的一幕を語った胡の元秘書は、項羽も自殺の場・烏江畔で大泣きしたに違いないと言う⁴⁴⁾。『史記・項羽本紀』の「涙下数行」は四面楚歌の垓下の場面だが、さて置き『史記』の人物との二重写しは興味深い。人物誌から成る此の民族誌の生命力は、同じ中国人の憧憬・恐怖の精神伝説たる野史小説と一緒に、正史記録の真面目な乾燥無情とは一味違う、真面目を覗かせる生動有情にも在るが、形象思维 - 表現は人文科学の利器にも成る。

1973年に『若き実力者たち』で頭角を顕わした記録文学作家・沢木耕太郎は、『ニュージャーナリズムについて』⁴⁵⁾の中で、60年代の米国に生まれ70年代後半から日本でも多用されるに至った表題の新概念を詳解した。講釈の起点は、代表作の『汝の父を敬え』(G・タリーズ、'71)、『ベスト&ブライテスト』(D・ハルバースタム、'72)と『最後の日々』(C・パーンスタイン、B・ウッドワード、'76)の共通項だ。

彼は3作を貫く志向として、先ず「“全体”への意志」を挙げた。其々マフィア一族の興亡、戦争への関与という国家の命運に関わる政策の推移、大統領と其の周辺の崩壊を描いた此等の作品は、全体を描き尽くそうとする欲求が底に潜んでいない物が無く、著者が望んだのは事件や人物の断片的な報告ではなく、一つの世界を現前させる事なのだ、と述べた。付け加えるなら、中国流で言う「重大題材」の規模も全体への意志を求める物が。

次に挙げられた志向は、「“細部”への執着」である。曰く、著者たちは固有名詞や日付の類

いばかりでなく、風景、天候、建物、人物の表情、服装、口調、視線、煙草の吸い方、酒の飲み方といった、凡そ犯罪捜査官くらいしか関心を抱きそうもない細部に強い執着を示し、細部の面白さを起爆剤として物語を推し進めて行こうとしているかの様だ。其の巨・細の二極は巡り巡って、「高瞻遠瞩（力拳百鈞）」・「明察秋毫」の対と重なる。

ニュージャーナリズム グッドファーザー
新報道主義文学の3作の「教父」、戦争への関与・決断、最高権力者の命運と絡むが、偉大な教師・父親・領袖として尊ばれた毛も戦中に「豪・毫」の両立を見せた。『走下神壇の毛沢東』（権延赤、1989）に下記の好例が出るが、其の直前にニクソンの『リーダーズ』の語録が引かれた。「通常、我們対戦時領袖的評價高於和平時期的領袖，部分原因是因為戦争必然帶來戲劇性的事件。」「戦時的挑戦使領導人所顯示出来的品格易於衡量。」

神壇から下りた毛の素顔を語る元護衛長・李銀橋は、回顧談の中で此処だけ他者の論著を引き、一理有ると賛同した⁴⁶⁾。戦時の指導者が平時の其より高く評価される一因と言う戦争の^{ドラマ}戲劇性、指導者の素質が顕われ易い戦時の挑戦の効用に対する共感・共鳴は、彼や延安に懐胎された⁴⁷⁾軍専属作家の記録者・権も強く持つのだ。『LEADERS』の中国語訳が原著の翌年（1983）、日本語版より3年早く出た事⁴⁸⁾事も、示唆的である。

筆者が此の著書を論考の手掛りにし、21世紀の日本に有益な1冊にも推した⁴⁹⁾のは、平和不感症に罹った今の此の島国が最も欠乏した養分の為だ。ニクソンは周恩来を些事への配慮の集積が偉大さを作る典範とする一方、細事に気を配りながら決して其に溺れず、一本ずつの樹に注目しつつも森を見失わぬ彼の大局観を讃えた⁵⁰⁾。森羅万象を眼底に収め尚且つ一本の樹も疎かにせぬ毛の対極の流儀は、李銀橋が口述した戦の例に集約される。

珍宝島戦闘とも重なる話だが、国民党の大軍が30里（1里 = 0.5^きロ）、20里、10里前と、党中央機関の所在地へ攻めて来た際に、或る身辺護衛が3回毛の部屋に入り敵情を伝えた。大事な思考の時に邪魔を許さぬ毛は、遂に机を敲いて怒鳴り追放まで宣告した。だから何だ、10里8里とは話に成らん、俺の処は960（平方）^きロも有る；君は「婆婆媽媽」（^{くど}諍い）、此処には向かんから、さっさと消えて外の歩哨に異動しろ、と⁵¹⁾。

全国の面積を持ち出して焦眉の急を顧みぬのは、「天地転、光陰迫」にも拘らず「一万年」を論じると同じだ。但し、部下の諍さに立腹した彼であるが、其の語録は「文革」中に復唱される時好く、「毛主席諍諍教導我們」（毛主席は諍々に斯く教示して下さいました）と言う枕詞が付けられた。「大智大勇」を支える「綿裏藏針」を証す様に、彼は同じ時期の戦役の前に前線司令官・彭徳懷に電話し、塹壕の位置まで細かくで指示した⁵²⁾。

本論文の冒頭で言及した指導者に必要な鷹の眼と蟻の目は、正に全体への意志と細部への執着だ。相反するかに見える其の両面は、沢木耕太郎には矛盾しない物と思われた。彼は小田実の「“鳥瞰図”的な人間・“虫瞰図”的な人間」と言う物の見方の類型化を用いて、^{ニュージャーナリズム}新報道主義とは虫の歩きの中で鳥の視線を持ち、虫に由る「鳥瞰図」を書く事だと断じた。其の手本とさ

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

れたのは、『最後の日々』の次の断片だ（中略は筆者に由る）⁵³。

「キッシンジャーはその小部屋に入って行った。何時も見かけて来た様に、大統領は椅子に座っていた。ニクソンは彼をこの国で最も尊敬される人物にしてくれたのであるが、長官はどうしても彼に好意的に成れなかった。二人は暫く腰を下ろして、様々な事件、旅行、共に検討した決定などの思い出を語り合った。大統領は飲んでいて、辞任する心算だと言った。（略）二人は静かに話を続けた 歴史、辞任の決意、外交問題に就いて。」

「その後、大統領は辞任が可能かどうか確かでないと言った。（略）キッシンジャーはそれに答えて、大統領の功績、殊に外交における功績を数え挙げた。／“歴史は、現代の人間よりも私を好意的に扱ってくれるだろうか？”とニクソンは訊ねた。涙がその目に溢れていた。／勿論です。確かですよ、とキッシンジャーは言った。全て終れば、大統領はその達成した平和への貢献者として記憶されるだろう。／大統領は崩折れて泣いた。」

沢木は従来のジャーナリズムの表現の例に、ジョン・ガンサーの『回想のローズヴェルト』（1950）の一節を挙げた。其の長文は紙幅の都合で割愛するが、真珠湾事件の際の主人公の沈着、衝撃に対する弾力性と勇氣に就いての作者の語りを裏付ける形で、其の緊張を自信と統率力の証に捉える関係者の証言・論評が綴られている。共に米国を代表する報道人が其の時代の^{ジャーナリスト}大統領に就いて書いた2作から、沢木は決定的な差異を見出した。

彼が言うには、『回想』がエピソードを連ねる事でローズヴェルトを描こうとしているのに対して、『日々』は精緻でリアルな細部を持ったシーンを幾重にも重ねる事でニクソンを描こうとした；シーン（舞台・背景・場面・情景・及び其の全て）の描写は、人と人が物と物とが絡み合い言葉やエネルギーが交錯する事で生じる「場」を、一つの生命体として描く事だが、エピソードとは左様なシーンの干涸らびた残骸に過ぎないとも言える。

エピソードは常に細部の省略に由って象徴的な物に転化して行き、其の分だけ虚偽の混入し易い隙間を作ってしまうが、ニュージャーナリズムが執着する細部は、シーンの描写に由って始めて全体化されるのだ、と言うのが彼の新・旧表現法の線引きだ。徹底的な取材に依る「見て来た様な本当」の細部に支えられる^{みずみず}瑞々しいシーンを、畳み掛ける様に展開する3代表作は、作品としての自立性、読み物としての力を獲得した好例だと述べた。

沢木はシーンの描写で文学の領域に踏み込んだ^{ジャーナリスト}報道者の危険を指摘する一方、小説の技法の導入に由り論文を強烈で劇的なうねりの有る人間の物語に化したO.ルイスの試みを礼賛した。調査とシーンの描写を積み重ねた上で、1民族の1階級の1家族の1日を見事に描いた『貧困の文化』（1959）の技法を、彼の文化人類学者は^{リアリズム}文学的な現実主義に対置して民族誌的な^{リアリズム}現実主義と呼んだが、其の文学への接近も新志向として認められた。

研究分野を比較文化や国際関係に置き換えても、2昔前に日本の^{ニュージャーナリズム}新報道主義の旗手が提示した其の指針は有益だ。事実と心中はせず事実の利用を大事にする文学者と違って、^{ジャーナリスト}報道者も学

者も事実に対する倫理観の拘束で、想像力の駆使に基づくシーンの獲得も恣意に由るシーンの変形も許されぬ、という境界線を劃した上で、^{デューク}数拠や挿話を出所の明記が無い儘シーンに溶け込ませ、恰も神の口から告げる様な手法を、彼は「頹廢」と喝破した。

疑念や検証の余地も与えず其を事実として受容させる様な、事実の倫理観の喪失が始まれば、書き手はシーンの変形から創作へと進む果てに、事実らしき素材を使う小説家に成る、という変質の経路を示す沢木は、厳しい取材の持続にも耐えられず奔放な想像力の飛翔も出来ず、両者の安易な結合へ向う傾斜を軽蔑した。其の記録文学の領分の規律は、此の論考の物語化の「誠」(倫理観)と「言・成」(言説の成立)の結合にも刺激と成る。

同時代の死角・人間存在の深淵の「今・心・念」への追跡・把握

事実への倫理観はシーンの自由で豊富な獲得の枷と成るからこそ、取材を極限まで推進するより他に突破口は無いとの断念、其故のエネルギーが生まれるのだ；無数のドキュメントを探索し無数の人物に会见する事に由り、報道者は始めて虫の歩みの中で鳥の視線を持てる様に成る、と言う論断は彼の実践から出た真智だ。其の「断念」は断定的な観念へも転じられるが、自壊への自戒と共に彼が説いた磁界は、正に「念」の字形の今・心だ。

^{ニュージャーナリズム}新報道主義の問題は何よりも技法だったが、其の技法に由って何を書こうとしたのか、と沢木は自問し結論の擁護と批判を展開する。彼等は小説家が手を付けかねていた現代という時代、詰まり「今」の雑多な対象に果敢にぶつかって行く冒険心を持っている；「今」に添い寝をし「今」を書くのが、米国で^{ニュージャーナリズム}新報道主義が存立し得る条件だった；日本の多くの^{ニュージャーナリズム}新報道主義的と呼ばれる作品には、最も重要な「今」を描く志が欠落している、と。

日本の書き手は過去の完結した、法廷で決着の付いた殺人事件の様な物を好んで扱い、此は日本で取材に拠ってシーンを獲得する事の絶望的な困難と無縁ではない；仔細に考察して行くと、書き物としてのドキュメントに対する日本人の考え方や、日本人の会話に於ける言葉の質といった文化の基底に至る問題に繋がって行く、と指摘した沢木は、此の別の大きな主題の提起を以て文章を結んだが、此の論考の方法論への示唆は一応出揃った。

沢木は多くの選手の奮闘と悲劇を描いたが、其の得意分野の体育でも儘有る様に、圏外の物事は好く新機軸の起爆剤たり得る。驚異的な百[㌠]競走世界新記録の創造・保持者をここ数年に輩出した米国の倶楽部の名伯楽は、無駄な出力を抑え前向きの加速を高めるべく最初の20[㌠]では頭を限界までに下げた儘で走る流儀を編み出したが、陸上競技の常識を破った其の遣り方は、日本の氷上競技の名手・清水宏保の滑り方から思い付いた物だ⁵⁴⁾。

日本で論理武装が強化された米国の^{ニュージャーナリズム}新報道主義の要素を此の論考に取り入れるのも、一種の「触類旁通」(或る物事から触発されて他を類推すること)だ。只、敗者の生き方・死に様や敗

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

北の美学に拘り続けた沢木は、^{ダンディズム}瀟洒趣味の世界に入り浸って久しいし、元より「重大題材」に縁遠いから、其の実践は手本に成るまい。時代への生動で尖鋭な照射に成功した第一級の現役^{ノンフィクション}記録文学作家には、彼と同じ1947年生まれの佐野眞一が居る。

沢木は32歳で『テロルの決算』に由って大宅壮一賞に輝いたが、日本の^{ノンフィクション}記録文学の此の桂冠が佐野に授けられたのは18年も遅い（『旅する巨人』、1997）。早熟より晩成が似合う後者の大器は、不遇の頃の『昭和虚人伝』（1989）にも十分に窺える。前出の「裕仁的 v s . 角栄的」の図式と重なるが、昭和末期の怪しき成功者の実像を抉る6篇の中に、リクルート疑獄を惹起した江副浩正等の^{バブル}泡沫紳士の他に安岡正篤も登場した。

後者は高野孟の分類では昭和天皇側の表徴と成るが、占いブームの仕掛人・細木数子に魅了され利用された晩年の姿に、戦後総理群の思想的な指南役の裏面が端的に現われた。佐野は綺麗事の背後のドロドロを暴く反面、濁・暗の中の清・明にも視線を注いだ。其の一例は「大殺界の怪女」の介助に由る入浴だが、長年の怨念が解けて江副浩正と老いた父親と一緒に風呂に入る場面と合わせて、佐野流の人間模様の挿話・^{シーン}情景も真・心に迫る。

沢木は決着済みの殺人事件の類いを好む^{ノンフィクションライター}記録文学者に不満を表明したが、佐野の『東電OL殺人事件』（2000）は係争中の殺人事件を追跡した物だ。作者の主体的な関与に由る「私ノンフィクション」の実験を、沢木は『一瞬の夏』（1981）で見せた。馴染みのボクシング選手の復活戦を自ら仕掛けた手法は、事実の演出を排す従来の^{ノンフィクション}記録文学の型を破ったが、佐野も被疑者や其の故国の家族への密着を新作の今・生の目玉に用いた。

ネパール人の冤罪を晴らす為の奔走の末、一審裁判を勝ち取った日に作品は完結した。『一瞬の夏』の作者が情熱を賭けた復活試合は、選手の栄辱と作品の成敗に関わるが、『東電OL殺人事件』の場合は生身の死活にも係かる。現実との運動度は前者が高いが、迫力は後者の方が強い。事実との心中も辞さぬ程の懸命さと、事実と距離を取る賢明さを持ち合わせる佐野は、海外にも及ぶ舞台・物語の時空の壮大さと共に^{スケール}観念の規模を見せた。

著者は1997年に起きた表題の事件を泡沫経済崩壊後の世相の表徴に捉え、敗戦翌年の坂口安吾の『墮落論』等を形而上的な照射の光源に使った。沢木は上記の文章の3年後の『再び、ニュージャーリズムについて』（1981）の中で、もっと自由でもっと猥雑でもっと重層的でもっと^{エネルギー}精力的な方法を唱えた⁵⁵⁾が、現場百回の「虫歩」と超越旋回の鳥瞰の有機的な結合から成る此の大作は、^{たかさ}観念と^{ふかさ}形態の^{はびるさ}両面で^{ちからづよさ}其の大欲の追求を実現した。

傑作や大作の「^{たかさ}高度・^{ふかさ}深度・^{はびるさ}広度・^{ちからづよさ}力度」は、長期熟成の蒸留酒の醇厚・奥深さや巨樹の年輪・強靱さの様な物だ。被害者が売春の為に立った東京・円山町への調査は、其の亡父の故郷（岐阜）や職場（東京電力）の接点に在る御母衣ダム（1960年完成）に向わせ、両地の地形や歴史の類似から、高度成長の光と影が鮮やかに浮上した。其の地下水脈を突き止めた粘り強い行動力と柔軟な発想力は、『性の王国』の^{開花}・^{結実}結実と思える。

佐野は此の出世作（1981）の中で、全国屈指の歓楽街・雄琴等を通して日本の変哲の姿を活写した。又「裕仁的・角栄的」の図式と重なるが、昭和天皇が77年に滋賀に行った時、国道の傍の「性処理工場団地」が竜顔を曇らせぬよう、役人が窮余の一策に経路を変えた⁵⁶⁾。平成元年に援助交際の発覚で首相を辞めた男も同県出身だから、虫の潜行と鳥の飛翔に由る予言書の観さえ有るが、作者の出発点と到達地の接点は其に止まらぬ。

大企業の管理職の裏面の真相と深層を探る此の作品には、『性の王国』の底無し穴と『昭和虚人伝』の伏魔殿、『カリスマ 中内功とダイエーの「戦後」』（1998）の“第二の敗戦”の世紀末的暗闇⁵⁷⁾が交錯する。海外の戦場で九死一生を得て戦後復興の中で急成長し、飽き無き商いを追いつける末に破局へ向った中内功は、生存本能と性感発信を企業の生命線としたが、此等は全て食欲・性欲を切り口にする此の論考と繋がる。

買春客の名を記す被害者の手帳に元上司なる故大平首相の息子が出た謎から、大平正芳が円山町の花街に足繁く通い愛人まで作った事実も発掘されたが、貧しい田舎から上京し活路を求めた過去に対する田中首相と大平外相の回顧（前出）が甦る。政治家・大平の私生活の影も、息子の疑惑と被害者の暴走も、ダイエー王国と創業者の「驕れる者は久しからず」⁵⁸⁾も、日中の泡沫経済、失政と激変を背景とした此の指導者論の文脈と関わる。

『カリスマ』の「プロローグ」が明かす様に、作者の生家の東京下町の零細商店が傾いたのは、ダイエー等の巨大スーパーの蹂躪の結果だ。故に覇者・中内ダイエーは個人史にも繋がる骨絡みの主題だが、山一衝撃を挟んだ雑誌連載期間（97年6月～翌年2月）中の経済危機の進行に対応しつつ、対象の興亡を振り返り歴史的な位置付けを探る此の一作は、現実への主体的な関与を第一義に行なう二重の「私ノンフィクション」と言えよう。

誕生の原点に敗戦・墮落を含む彼の社会への立ち会いと形而上の臨場感は、同時代の中国・中国人にも既視感の有る。『一瞬の夏』の内藤選手の弱気と『カリスマ』『東電OL殺人事件』の主人公の邪気は、安岡正篤が飯の種とした王陽明の言う「心中賊」だ。歴史や偉人の暗部・ブラックボックス「黒 匣」に目を注ぐ本論考と暗合するが、事件の迷宮と心霊の迷路に挑む佐野の格闘は、「解山中賊易，解心中賊難」とも言うべき困難の逆説的な解決を示した。

記録文学の要諦は解らない事は正直に解らないと書く事で、解らない事を賢しらに如何にも解った様に解釈して見せる一知半解こそ記録文学の邪道だ、と作者は此の新作の最後に語った。幸田露伴は明太祖死後の中国の内乱を描く史伝小説・『運命』（1919）の冒頭で、老子の「知者不言，言者不知」⁵⁹⁾を引用し、自跋（'38）で建文帝失踪の謎に対する安易な推断を否定したが、佐野流は其の碩学文豪や中国思想の智恵と通じる。

次の「片々たる事実をジクソーパズルのように丹念に詰め込んで、残ったピースの在りかを空白のままですすことこそ、ノンフィクションライターの勲章ではなかったか」は、遺族の拒否に由る肝要な基礎的取材の欠落、他界した対象の心の闇に対する直観の実証不可能を意識し

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）
た開き直りでもあろうが、続きの述懐と合わせて正当性を認めて良い。「私は人間存在の深淵のほりに招かれた感慨にとらわれ、慄然と立ち尽くす思いだった。」

此の渾身の力作は様々な混信を濾過し、生者と死者の今身（今生の身体）の有様を写し出す。金銭・瘦身への強迫観念に囚われて喪心の非行に走った主人公の深淵への透視は、作品の深遠・肥厚を成した。作者曰く、「肥厚した“土地”の地層を掘り返し、窒息した“物語”を生き返らせる。私は事件の謎と渡辺泰子の内面の謎を追いながら、そのことを強く企図した。それが事件の謎と渡辺泰子の内面の謎に光を当てることにもつながる。」

主人公・小淵恵三の急死後に刊行した佐野の『凡宰伝』は、同年の『東電OL殺人事件』と共に、皮相的に見られがちな人物の悲愴・悲壮な内面を描き切った好著だ。此の系列論考の出発点は他ならぬ、『カリスマ』上梓の98年7月の小淵新総裁の誕生だ。同時代の日本の頹廢・劣化を浮き彫りにした此の3作は巡り巡って、本篇の主題の王・民の大欲・大恐が其の表現対象の深層心理、時代精神、乃至作品成立の動力の一部を成す物だ。

（以下次号）

「真空首相」・小淵恵三と梶山静六、竹下登が死去
し、森内閣の「低空飛行」が続く2000年年央

註

- 1) 本論考は本誌11巻2号以降の、当代日中の進路や指導者の条件に就いての系列論文の一環だ。重複を避ける為に、既出の記述は一部「前出」等の形で処理し、註も一部敢えて省略した。
- 2) 中国古代の諸説に基づいた内野熊一郎の訳註。内野熊一郎『新釈漢文大系4 孟子』、明治書院、1962年、30～31頁。
- 3) 原文は「辟土地，朝秦楚，莅中国，而撫四夷也。」
- 4) 原文は「以若所為，求若所欲，猶緣木求魚也。」
- 5) 江沢民・朱鎔基等の賞賛を得た二月河の長篇小説・『雍正皇帝』には、臣下に雷を落とす康熙帝が壁に掛かった自筆の「耐煩」を見て怒りを抑えた、という場面が有る。（上巻『九王奪嫡』、長江文芸出版社、1991年、88頁）
- 6) 『辨奸篇』の作者は蘇洵とされるが、批判対象の王安石の変法は蘇の逝去（1066）の3年後に始まったので、明らかに其の名に託した偽作だ。（闕勲如他訳註『古文觀止』下、湖南人民出版社、1982年、342頁）王安石の事績は系列論文の前にも出たが、其の大胆な政治・経済改革が中国では長い間に貶され、逆に現代や海外で高い評価を得た事は、中国の改革者の宿命を暗示する現象だ。一方、『辨奸篇』は服装や生活習慣から人の性質を断定する乱暴さや、蘇洵逝去の丸9百年後の林彪の引用にも拘らず、「見微而知著」の命題が今だに生命力を失っていないのは、中国思想と中国人の幅広さの証か。
- 7) 蘇曉康・羅時叙・陳政『「烏托邦」祭 1959年廬山之夏』、中国新聞出版社、1988年、373頁。
- 8) 「革命不是請客吃飯，不是做文章，不是繪畫繡花，不能那樣雅致，那樣從容不迫，文質彬彬，那

様温良恭儉讓。」(毛沢東『湖南農民運動考察報告』, 1927年)。「文質彬彬」の出典 孔子の「質勝文則野, 文勝質則史, 文質彬彬, 然後君子」は, 系列論文の前に出た「文・野」の対極の由来だ。

- 9) 邱永漢『中国人と日本人』, 中央公論社, 1993年, 64頁。
- 10) 11) 12) 高野孟『田中角栄の読み方』, ごま書房, 1983年, 48, 22, 38~39頁。
- 13) リチャード・ニクソン『ニクソン回顧録』第1部『栄光の日々』, 松尾文夫・斎田一路訳。1978年(原典同), 小学館, 329頁。少なくとも現在の米国では, 左派の者が口先だけで言っている事を, 右派の者なら実行できる, とニクソンが其の席で言った。
- 14) 政治的な遺書に当る「文革」初期の夫人宛ての書簡の中で, 毛は反共の右派への対抗意識を顕わにする一方, 敵が権力を握る可能性に触れた。其の件を彼は反動的な言論に近い物で, 当面は公表できないと述べた。又, 紅衛兵の造反の行き過ぎと勢力の膨張を抑える為に, 彼は自分こそが「保皇派」の最大の「頭子」(親玉)だとも言った。
- 15) 末永勝介『近代日本性豪伝 伊藤博文から梶山季之まで』, 番町書店, 1969年, 203頁。
- 16) 多数の文例が有りながら, 何故か使い分けの法則の明記も此に関する言及も, 筆者の広範な渉獵の範囲内では見当たらない。
- 17) 松下幸之助の随筆の題。『文芸春秋』に6回に亘って連載された後, 1965年に『なぜ』(文芸春秋)に収録された。
- 18) 出典は『荀子・榮辱篇』の「先義而後利者榮, 先利而後義者辱」。
- 19) 『論共産党員の修養』, 『劉少奇選集』上巻, 人民出版社, 1981年, 111頁。
- 20) 新村出編『広辞苑』(第4版)の「商い」の解には, 「(東雅に, 「あき」は秋で, 農民の間で収穫物・織物などを交換する商業が秋に行われたのによるとある)」と有るが, 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』の「商う」の解には, 「二 漢字「商」に秋の意があるとする説は疑わしい〔日本の言葉 = 新村出〕(略) アキは飽く意。互いに利を得ることから〔和句解・名言通〕」と有る(第1巻, 小学館, 1972年, 147頁)。因みに, 中国の陰陽原理では, 五音の中の「商」と五時(季節)の中の「秋」は, 同じ五行の「金」の系列に属する。
- 21) 惚気話のろけばなしを聞いて「御馳走さま」と言う日本的な表現も, 陸機『日出東南隅行』が出典の中国流の「秀色可餐」(女性の容姿や景色の美しさが食べたく成る程に溢れる様)と同じく, 色・食同源の「通感」の産物か。対して, 『広辞苑』の「秀色」は「美しい色」だけだ。但し, 中国の場合は肉と欲の直結がより感じられる。例えば, 下種の小咄は俗に「暈段子」と言い, 宴席の余興で其を披露する慣習や奉仕は今も行なわれている(李佩甫の小説・『羊の門』, 華夏出版社, 1999年, 269頁)。20世紀中国の漫才の第一人者・候宝林は1961年, 周恩来の指示に従って, 文化遺産を保存すべく, 『王二姐思夫』等の「暈段子」を録音したが, 死後に無断で発売された。97年, 遺族が名誉を守る為に訴訟を起した。(『東方時報』2000年5月31日)最晩年の毛は憂鬱を解消する為に候宝林の漫才の録画を観賞した, と噂されている。張賢亮の小説・『習慣死亡』には, 国家を代表する出版社が毛の為に特製した大字本の『笑話大全』が登場し, 中身の品位は《PLAY BOY》や《PENTHOUSE》の写真に遥かに及ばぬと言う(『張賢亮愛情三部曲』, 華芸出版社, 1992年, 472頁)。翻って, 「意淫」(精神的な淫行)の肴を言う日本語の「おかず」も, 色・食相関の発想か。
- 22) 「子在齊, 聞韶樂三月, 不知肉味。曰, 不図為樂之至於斯也。」(『論語・述而』)
- 23) 「子欲居九夷。或曰, 陋如之何。子曰, 君子居之, 何陋之有。」(『論語・子罕』)「子曰, 賢哉回也, 一簞食, 一瓢飲, 在陋巷, 人不堪其憂, 回也不改其樂, 賢哉回也。」(『論語・雍也』)「徳不孤, 必

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論）（夏）

有隣。」（『論語・里仁』）

- 24) 山本健吉『いのちとかたち 日本美の源を探る』, 新潮社, 1981年, 11頁。
- 25) 高陽『胡雪岩』, 浙江文芸出版社（改題 = 『一代巨賈胡雪岩』）, 1994年新1版, 下642頁。「経商必読奇書」はこの^{テキスト}版本の表紙の謳い文句。
- 26) 『辞海』「種 人和其他生物的族類。如：伝種；絶種；黄種；黒種；白種。引申為後嗣。『晋書・劉頌伝』：“及趙王倫之害張華也，頌哭之甚慟；聞華子得逃，喜曰：‘茂先，卿尚有種也。’”（1963頁）
- 27) 『辞海』「種子」（1963頁）
- 28) 「我們共产党人好比種子，人民好比土地。我們到了一個地方，就要同那里的人民結合起来，在人民中間生根，開花。」（毛沢東『關於重慶談判』, 1945年）
- 29) 張賢亮『男人的一半是女人』（1985年）, 『張賢亮愛情三部曲』, 華芸出版社, 1992年, 180頁。
- 30) 毛毛『我が父 鄧小平 新中国誕生への道』, 長堀裕造他訳, 徳間書店, 1994年（原典 = 1993年）, 39 ~ 40頁。
- 31) 32) 「感情的にも，演劇上にも，作品は人工的だった。多くの点で，それは1959年にレニングラードで観たバレエ『スパルタカス』を思い出させる（略）。この『スパルタカス』は，最後に奴隷が勝つように書き変えられていた。」（前掲文献13, 340頁）
- 33) 34) 司任『孫玉国の昨天和今天』, 司任主編『「文化大革命」風雲人物訪談録』, 中央民族学院出版社, 1993年, 151, 150頁。
- 35) 石川九楊『二重言語国家・日本』, 日本放送出版協会, 2000年, 154頁。
- 36) 内山完造『表門と裏門』（初出 = 『おなじ血の流れる友よ』, 中国文化協会, 1948年）, 『中国人の生活風景』（東方書店, 1979年）所収（11 ~ 12頁）。
- 37) 「鉄面」は日本語で「鉄面皮の略。（明治期の語）」（『広辞苑』）, 専ら無恥を表わすが，中国語では無私の非情という肯定の意だ。「鉄面皮」に当る中国語は，「厚臉皮」「臉皮厚（老）」と言う。
- 38) 香港の或る大物華僑の片腕を務める日本人が，中国人の建前と本音の乖離を形容した言。加藤鉦『ヤオハン 無邪気な失敗』, 日本経済新聞社, 1997年, 85頁。
- 39) 張濤之『中華人民共和国演義4 文化大革命』, 伏見茂・陳栄芳・沈宝慶訳, 冒険社・赤組, 1996年, 309頁。
- 40) 此の語彙の出典は〔南朝・宋〕顔延之『秋胡詩』の「原隰多悲涼」。魯迅は『中国小説史略』（1924）の中で，『紅樓夢』の「悲涼雰困」に言及し，1980年代，文学評論家・黄子平等は此を20世紀中国文学の雰困気の鍵言葉に使った。
- 41) 譚璐美『チャイニーズ・パズル』, 新潮社, 1994年, 26頁。
- 42) 51) 52) 權延赤『走下神壇的毛沢東』, 中外文化出版公司, 1989年, 39 ~ 41, 21, 同頁。
- 43) 44) 胡耀邦の長年の秘書・趙延の言。上村幸治『中国権力核心』, 文芸春秋, 2000年, 54頁。
- 45) 1978年。沢木耕太郎『路上の視野』（文芸春秋, 1993年）所収（42 ~ 48頁）。
- 46) 前掲文献42, 21 ~ 22頁。文中，ニクソンの言葉を一理有るとした李銀橋の「無不道理」は，「不無道理」（一理有る）の誤植か。
- 47) 『走下神壇的毛沢東』裏表紙の紹介。作者は1945年に延安で懐妊され（出産は内蒙古）, 此が名前の「延赤」の由来と成った。
- 48) 『領導者』, 世界知識出版社。
- 49) 季刊『あうろーら』（《21世紀の関西を考える会》機関誌）21号（近刊）特集・『21世紀への

100冊』に、筆者は此の本と松下幸之助『商売心得帖』、石川九楊『二重言語国家・日本』を推薦し、入選した後者の解説を担当した。

50) リチャード・ニクソン『指導者とは』、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1986年(原題『LEADERS』、原典1982年)、251頁。

53) 『最後の日々』の日本語訳 = 常盤新平(文中明記)

54) NHKスペシャル『世界最速を作り出せ』、2000年9月9日放送。

55) 沢木耕太郎『再び、ニュージャーリズムについて』、前掲『路上の視野』、72～78頁。

56) 佐野真一『トルコ村の社会学』、『性の王国』(文春文庫、1984年[単行本 = 文芸春秋、1981年])所収(101～102頁)。

57) 佐野真一『カリスマ 中内 功とダイエーの「戦後」』、日経BP社、1998年、643頁。

58) 前掲文献57の宣伝帯の此の言の出典は『平家物語』、下敷きは老子『道德経』の「自矜者不長」。

59) 「先哲曰く、知る者は言わず、言う者は知らずと。」

“王、民之大欲、大恐”：領導人自我意識、強制觀念 及中国人精神伝説之深層(序論)

本論文は本刊第11巻第2期(1998年)以来連載の系列論文之一部分。繼前数篇論及的關係到国家、民族進程の領導人之素質和条件、權威性和危機感、本篇試図進一步深入揭示領導人之自我意識及強制觀念の深層所蘊蔵の朝野、官民共同的終極性欲求和恐懼。

本系列論文以尼克松的『領導人』為線索、以林彪事件、尼克松和田中角栄為邦交正常化訪華、直至美日的這兩位領導人因醜聞下台、周恩来和毛沢東逝世、「文化大革命」終結為止的時期為主要断面、剖析有關歷史人物的心跡、從中尋求領導人的普遍性心態、並对中国和日本(尤其是共產党中国和戦後日本)的政治、社会、文化、国民性等進行比較。

作為再現歷史、忖度内心的方法論之一、筆者嘗試導入上述期間出現的美国新新聞主義的思惟 - 表現方式、注重易被學究式論考輕視的生動而又富有象徵性意義和實質性作用的情景和細節、通過具体的探索和形象的表述、追求研究對象之人物、事件、原理等的機制、奧秘。

(Xia Gang, 本学部助教授)